

Title	大阪大学における学生参加型FD・教育改善活動の比較分析：パンキョー革命・STAR 阪・人科祭シンポジウムを事例として
Author(s)	前田, 裕介; 服部, 憲児
Citation	大阪大学高等教育研究. 2014, 2, p. 33-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/28095
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学における学生参加型FD・教育改善活動の比較分析

— パンキョー革命・STAR阪・人科祭シンポジウムを事例として —

前田 裕介^{*1}・服部 憲児^{*2}

A Comparative Study of Students-Participatory FD in Osaka University

Yusuke MAEDA^{*1} and Kenji HATTORI^{*2}

There is a recent need for university education reform which prioritizes the viewpoints of students; however, reform of this nature is yet to make significant progress. The Students-Participatory FD is one strategy which aims to break free from the current situation. This research compares the "activity contents", "activity objectives and policies", "activity background and current university conditions", "relationship between students and faculty", and "achievement status of results and goals" of three Students-Participatory FD activities, namely Liberal Arts Revolution, Student-Teacher Association for Refining HANDAI, and School of Human Sciences Festival Symposium, which have been implemented at Osaka University over the last 30 years.

Results reveal that the quality of activities improves as we move from the past to present. In addition, the research revealed that constant dialogue and cooperation between students and faculty is desirable. Moreover, although the results reveal that students felt dissatisfied with lectures in all of the periods examined, implementing activities which involve these students was found to be important.

Keyword : Higher Education, Student Participation, Faculty Development, Teaching Development, Staff Development

1. はじめに

大学教育の改善が求められて久しい。戦後でも、昭和38年には中央教育審議会が「大学教育の改善について(答申)」を出している。もちろん、時代によって大学教育が抱える課題や改革の方向性は一様ではない。近年の動向、とりわけ学生の視点を取り入れた大学教育改革ということに絞って考えると、大きなきっかけとなったのは2000年に出された「大学における学生生活の充実方策について(報告)」(いわゆる廣中レポート)である。

そこでは、「教員中心の大学」から「学生中心の大学」

への転換が主張されている。また、この流れをくむ中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて(答申)」(2008)では、ティーチングからラーニングへの転換、つまり何を教えたかよりも何を学んだかが重要であることが強調されている。さらに、2012年に出された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」では、授業外での学習の重要性に注目が集められている。

所 属 : ^{*1}大阪大学大学院人間科学研究科 ^{*2}京都大学大学院教育学研究科

Affiliation : ^{*1}Graduate School of Human Sciences, Osaka University ^{*2}Graduate School of Education, Kyoto University

連絡先 : u163982a@ecs.osaka-u.ac.jp (前田裕介)

2. 問題と目的

このように、ここ10年に限定しても授業を中心とした大学教育の改善が求められている。しかし、継続的な大学教育改革の要請は、見方を変えれば10年前から学生の視点の重視が指摘されながら、それが達成されていないことの表れでもある。つまり、学生の視点を重視した大学教育及び大学の授業の改善は、全くとまでは言わないまでも、あまり進んでいないのが現状と言えよう。

この現状を打開する一助となると考えられる代表的な取り組みが、学生参加型のFD・教育改善である。これは学生中心の大学とFDの推進という2つの大学政策の交点に位置づけられるものであり、学生の参加を得て行われるFD活動ないしは教育改善のための活動を指し、学生の意見の聴取、学生との対話や交流の要素を取り入れたFD・教育改善活動、およびこれらに附随する諸活動である。上述の廣中レポートが出された後に、国立大学を中心に2005年頃までこのような取り組みが行われたが、岡山大学を除いては定着しなかった(木野, 2012)。この時期の2005年には、大阪大学においても「STAR阪」という取り組みがなされたが2007年で終了している。

その後、学生参加型のFD・教育改善は再び私立大学も含めたいくつかの大学で取り組みがなされるようになり、i*Seeや学生FDサミット⁽¹⁾などの大学間交流イベントの影響もあって拡大し、2012年の時点では約50の大学で取り組まれていることが確認されている。(木野, 2012) 大阪大学においては、2008年から「学生・教職員懇談会(愛称:パンキョー革命)」(以下、「パンキョー革命」という取り組みがスタートし、現在も継続中である。このような近年叫ばれている大学教育改革の要請にマッチした学生参加型のFD・教育改善は現在進行形で拡大しているとみてよいだろう。

また、廣中レポート発表以前にも、学生参加が比較的活発に議論された時期があった。それは、大学紛争が社会問題化していた1960年代後半から1970年代前半である。しかし、この時期の学生参加論は、大学運営への学生参加、その根拠や正当化に主眼があり(廣内, 2008)、「授業に対する不満」という意識が学生に存在するという共通点はあるものの、学生と教職員がともに大学教育の在り方自体を考える、あるいはその過程をとおして学生の成長を期するといった要素は見られない。また、少なくとも現時点では、現行の学生参加型のFD・教育改善が政治化する可能性は極めて低いと考えられることか

ら、60～70年代の学生参加とは区別して考えるのが妥当であると思われる。

さて、大学紛争が終息し、2000年代に入るまでの間の時期は、シラケ世代、バブル世代などと位置づけられ、全国的に学生の側からの教育改善のアプローチが弱かった時期として捉えられる。しかしながら、学生参加の要求や取り組みが全くなかったわけではない。大阪大学においては1982年に人間科学部の学部祭(人科祭)において、学生有志から授業改善を提起するシンポジウム(以下、「人科祭シンポ」)が開催された。

本稿においては、同じ大阪大学内において、現在も継続中の「パンキョー革命」、廣中レポート後の改革の流れの中で取り組まれた「STAR阪」、そして約30年前に取り組まれた「人科祭シンポ」の3つの取り組みを事例として比較分析する。

具体的には、まず3つの学生参加型の教育改善活動を概観し、次に活動内容、問題意識、改善の方向性などの観点から、その相違について分析を行い、三者に共通する要素を探る。最終的に、これらを考察し、今後の大学教育改善に向けて得られる示唆を提示することを目的とする。また今回の分析では対象として、一般的に学生参加型FDの契機となったと考えられる「廣中レポート」以前の取り組み(人科祭シンポ)に遡って焦点をあてることで、より長期的な視点から大学教育の容易には改善ができない部分がどこかを明らかにする。

3. 3つの学生参加型FD・教育改善の活動

まず、「パンキョー革命」、「STAR阪」、「人科祭シンポ」のそれぞれの活動について、「活動内容」、「活動の目的・方針」、「活動の背景・大学の状況」、「学生と教職員との関係」、「活動成果と目的の達成状況」の5つの観点から概観する。

以下の記述にあたって、「パンキョー革命」は服部(2012)を、「STAR阪」は秦(2006)を主に参照した。「人科祭シンポ」はシンポジウム当日に同委員が発行したパンフレット『1982 人間科学部学部祭シンポジウム あきらめていませんか?おもしろくない授業』を参照するとともに、当時に学生として企画・運営を担当した「学部祭シンポジウム実行委員会」の中心メンバーであった2名に聞き取り調査を行い、信頼性を確保した⁽²⁾。

(1) パンキョー革命

①活動内容

パンキョー革命（正式名称は「学生・教職員懇談会」）は、学生と教職員が大阪大学の共通教育の在り方について立場を越えて自由に語り合うイベントである。初回のイベントは2008年に大阪大学の共通教育担当部局である大阪大学大学教育実践センター⁽³⁾（以下、実践センター）が、企画した。本稿執筆時点に至るまでこのイベントを7回開催し、他に各種関連イベントの企画・実施や、「パンキョー革命提議書」の実現に向けての活動を行っている。

これらの活動の企画・実施のために学生・教職員で構成される組織が「パンキョー革命推進チーム」（以下、推進チーム）であり、企画・運営段階からの対話型・学生参画型・三位一体型のFD・SDを目指している⁽⁴⁾。なお、パンキョー革命は、広義には推進チームの活動の総体を指す場合もある。

②活動の目的・方針

パンキョー革命の活動の目的は、大阪大学の共通教育の在り方について学生と教員が本音で語り合う場を設け、相互に各人の意識を高め、よりよい共通教育を構築すること、また、それらを通して「阪大文化」を創造することである。

③活動の背景・大学の状況

イベントとしてのパンキョー革命（当初は「学生・教職員懇談会」）が初めて開催されたのは前述の通り2008年7月である。この年は、大阪大学と大阪外国語大学の統合後、初めて共通教育の授業が行われた年である。そのため、統合がもたらした共通教育へのメリットや課題はどのようなものであったかを検討する必要がある。

④学生と教職員との関係

パンキョー革命における学生と教職員の関係は対等であり、協働の体制がとられている。イベントのテーマや内容及び活動方針等については、ほぼ学生から案が出され、その実現にむけて教職員が助言や意見、並びに事務的な手続きを行うといった形である。また、教職員はイベント時の講演者やボランティアの人員を除き、業務として配置されているが、学生は全員が有志である。

⑤活動の成果と目的の達成状況

パンキョー革命はイベントや、毎週のミーティングに

おける議論の中で浮かび上がった授業に対する不満や問題・疑問点を学生と教職員の三者で検討し、より実現可能性の高い改善策を提案することを志向している。

具体的にはこれまでに、「パンキョー革命提議書」の作成の他、双方向型基礎セミナーの開講や、Webでの履修登録の利便性の向上等を実現してきた。目的の一つである「阪大文化の創造」については、実現に向けた継続的な活動を行いつつも、未だ道半ばではある。しかし、もう一方の目的である「よりよい共通教育の構築」については、前述の学生の要望をもとにして作られた授業の実施やWebによる履修登録の際の利便性の向上を実現するなど、サブスタンスとロジスティックの両面で成果をあげはじめている。また、最近では共通教育の枠を超え、大阪大学全体の幅広い問題に取り組んでいこうとする動きも出てきている。

(2) STAR 阪

①活動内容

STAR 阪（Student-Teacher Association for Refining HANDAI）は、パンキョー革命が始まる少し前の2005年から2007年にかけて取り組まれていた学生参加型の教育改善である。

約2年の活動期間に、①京大・阪大合同イベント（第1回「大学が変わるみんなで変える」、第2回「夢を探している君へー学生の夢をつむぐ大学ー」）、②京阪ゼミ（ディベート能力、コミュニケーション能力など学生の全般的能力の成長を促す活動）の開催、③共通教育フォーラム（大阪大の教員向けFD活動の1つ）の企画・実施などの活動を展開した。しかしながら、2006年5月頃に京都大学教育交流会プロジェクトの活動が実質的に終了することになり、活動の重要な動機付けを失うこととなった。

その後も、上述の共通教育フォーラムの企画・実施などを行ったが、学生メンバーが他の活動と掛け持ち状態であったこともあり、しだいに停滞していき、2007年7月頃に自然消滅的に終焉を迎えることとなった。

先述したパンキョー革命が開始したのは、この1年後であり、両者の間に連続性はない。

②活動の目的・方針

STAR 阪の活動の目的は「大学・教員と協力しながら、阪大を魅力ある大学にする」ことであった。

また、活動の方針として「学生が変わり、大学が変わる」という阪大の『成功事例』を示すことで、全国の

大学の先駆となる”ことを定めていた。

③活動の背景・大学の状況

STAR 阪は、先行して2004年より活動を開始していた京都大学の「教育交流会プロジェクト」の呼びかけに応じる形で始められた取り組みであり、大阪大学内に活動を喚起する状況は無かったものと思われる。

しかしながら、活動へ参加した学生の中には、「学生と教員との関わりが希薄である」、「内向的かつ活気が無い」という問題意識も存在していた。

④学生と教職員との関係

STAR 阪は当初のメンバーの募集こそ、教員によって行われたが、その後の運営は、ほとんどが学生メンバーのみで行われていた。

教職員に関しては共通教育の実施責任組織である、実践センターが、活動用のパソコンやプリンタ等の購入などの予算と活動場所（会議室）等の提供を行なう他は、担当の教員が広報誌に活動の概要の執筆を行ったり、活動報告書を発行する際の事務的な補助を行ったりといった関わりがみられた。

⑤活動の成果と目的の達成状況

STAR 阪の活動のうち、京都大学との合同イベントの開催は、両大学において広報誌に取り上げられ、学生と教職員が数十人規模で参加したことから、学生や教職員への啓発効果は一定程度あったと思われる。

また、STAR 阪では、実現こそしなかったが、「学生調査プロジェクト」、「他大学調査プロジェクト」、「教員と意見交換し、授業を作る」等、多くの活動が志向されていた。それらはほぼ、全て学生が企画・主導して進めるものであった。

(3) 人科祭シンポ

①活動内容

人科祭シンポとは人間科学部（人科）自治会の有志である「学部祭シンポジウム実行委員会」が企画したシンポジウム「あきらめていませんか？おもしろくない授業」である。このシンポジウムは1982年11月13日に人間科学部学部祭において開催された。

シンポジウムの実行にあたっては、実行委員会が教員・学生に対するアンケート調査及びインタビューの他、OBに対するインタビューを実施し、実情の把握や多様な意見の吸収に努めた。また、これらを分析してシ

ンポジウムを構成した。そこでは「教育ストラテジーと授業改善」、「人間科学と授業改善」、「進路と授業改善」の3つが論点として提示された。このうち最初の「教育ストラテジーと授業改善」については、他学部にも共通する問題として位置づけられ、「おもしろくない授業」として無計画な授業や一方通行型授業が挙げられた。

②活動の目的・方針

学生も教員も授業に対して不満を持っているとの現状認識から、その不満を放置することなく現状を改善していくこと、改善のための具体案を自由に討論することを目的として企画された。

③活動の背景・大学の状況

人科祭シンポが開催された1982年当時は人間科学部が創設されて間もない頃（創設は1972年）であり、学生と教員の双方に「人間科学部の授業カリキュラムについての不満」があった。特に学生には「人間科学の全体像をつかみたい」という想いと、「授業に対してのあきらめ」という想いが併存していた。また、大学を取り巻く社会的な状況に目を移すと、当時大学はいわゆる「大衆化」が進んだころであった。また、「大学はおしなべて閉鎖的であり、機能が硬直化し、社会的要請に必ずしも十分にこたえていない」、「いたずらに量的に拡大し、教育・研究の内容や質に欠ける傾向がある」との批判もなされていた（臨時教育審議会、1986）。

④学生と教職員との関係

人科祭シンポは人間科学部9期生の有志が集まってできた「学部祭シンポジウム実行委員会」が単独で企画・開催したイベントで教職員の直接的な関わりは見られなかったが、企画した学生には、授業の現状を改善するには教員の協力は不可欠であり、義務でもあるという思いがあった。教員へのインタビューはこうした思いを背景に実施されたものであるが、実際に10名の教員から回答を得ている。

⑤活動の成果と目的の達成状況

人科祭シンポでは、アンケートやインタビューで集めた学生と教員の意見をもとに、以下三点の論点で改善策を検討した。

第一の論点は「教員と学生のコミュニケーションのあり方」であり、具体的には教員と学生間のコミュニケーションの欠如という不満を解消するため、講義型授業か

表1 3つの活動及び5つの観点

	パンキョー革命	STAR 阪	人科祭シンポ
活動内容	・学生・教職員懇談会の企画/開催 ・教育改善関連イベントの企画/開催 ・提議書の作成	・京大・阪大合同イベントの開催 ・京阪ゼミの開催 ・共通教育フォーラムの企画・運営	・教員と学生へのアンケートやインタビュー ・人間科学部OBへのインタビュー ・授業改善のためのシンポジウムの開催
活動目的・方針	・よりよい共通教育の構築 ・阪大文化の創造	・大学と教員が共に協力し、活動する中で、大阪大学をより魅力ある大学にする	・学生・教官の授業に対する不満を放置せず、改善のための具体案を自由に討論し、現状を改善する
活動の背景 大学の状況	・大阪大学と大阪外国語大学の統合	・京都大学「教育交流会プロジェクト」に呼応	・人間科学部開設当初（開設10年目）
関係する答申類 (政策)	・廣中レポート ・学士課程教育の構築に向けて	・廣中レポート ・質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)	・臨時教育審議会第二次答申
学生と教職員 との関係	協働的	協力的	没交渉的
活動の成果と 目的の達成状況	・学生への啓発 ・教員・職員の参加 ・共通教育の内容及びシステムの一部改善 ・目的一部達成（活動継続中）	・学生への啓発 ・教員・職員の参加 ・目的一部達成	・学生への啓発 ・個人の問題意識解決 ・目的一部達成

ら演習型授業への転換や討論やグループワークの導入ということが議論された。

第二の論点は「授業計画について」であり、授業の目標や手順の明示、評価とフィードバックの計画的実施ということが議論された。

第三の論点は「授業の果たす役割について」であり、教員と学生のそれぞれが持つ授業観の違いを検討し、概論的な授業に対して学生が持っている不満を解決することが試みられた。

当日のシンポジウムにおいて実際にどのような議論が行われたのかは明らかではないが、目的の一つであった「授業改善のための具体案の討論」については達成できたと考えられる。もう一つの目的であった、実際に「現状を改善していくこと」については、人科祭シンポの後、実際に人間科学部の授業に継続的に形に残るような改善がなされたことは特にはなく、結果が出るところまではいかなかった。そのため、企画者の中には敗北感を感じた者もいたが、個人の問題意識の解決ということには多に資することも多かった。また、1982年の時点で授業改善に関する議論が組織的・計画的になされ、その中で「講義型授業からの脱却」や「授業計画の明示」という現代的な論点が提示されていたことは注目に値する。

4. 3つの活動の共通点と相違点

次に、第3章にて提示した3つの活動について、先に示した5つの観点から、共通点と相違点を探っていく。

まず、3つの活動と5つの観点についてまとめたものが表1である。表をもとに各観点別に詳しくみていく。

①活動内容・方法

各活動の内容・及び方法について比較すると、パンキョー革命は主に「学生・教職員懇談会の企画・開催」「教育改善関連イベントの企画・開催」、STAR 阪は「京大・阪大合同イベントの開催」「京阪ゼミの開催」「共通教育フォーラムの企画・運営」、人科祭シンポは「教員・学生・OBへのアンケートやインタビューの実施」「授業改善のためのシンポジウムの企画・開催」であり、各活動ともイベントの開催を足掛かりとして大学教育の改善を図ろうとしている点では一致している。しかしながら、そのイベントの継続志向という点で相違があり、パンキョー革命は複数のイベントを継続して行うことを志向しているが、STAR 阪は複数のイベントを散発的に、人科祭シンポについては一度限りのイベントという志向があった。

②活動目的・方針

活動目的・方針について比較すると、パンキョー革命は「よりよい共通教育の構築」「阪大文化の創造」、STAR 阪は「大学と教員が共に協力し、活動する中で、大阪大学をより魅力ある大学にする」、人科祭シンポは「学生・教官の授業に対する不満を放置せず、改善のための具体案を自由に討論し、現状を改善する」であり、それぞれ文面こそ異なるが、いずれの活動も「教育改善」を目指していたという点で一致している。ただ、パンキョー革命及び人科祭シンポは、それぞれ「共通教育」「人間科学部の授業」と対象を絞っている点で一致している。STAR 阪は対象について、「大学教育」そのものにしていて他二つと異なる。

③活動の背景・大学の状況

活動の背景や大学の状況については、パンキョー革命は「大阪大学と大阪外国語大学の統合」、STAR阪は「京都大学のプロジェクトに呼応」、人科祭シンポは「人間科学部開設当初」と、それぞれ異なり、共通点は現時点で見出せない。

④学生と教職員との関係

学生と教職員との関係については、パンキョー革命は三者とも関係が対等であり、常に連絡を密に活動している点から、「協働的」といえよう。

STAR阪に関しては、学生の他に教職員の関わりは確認できるが、学生の求めに応じて事務的な仕事等を担当していた点から、「協力的」であったといえよう。

人科祭シンポについては、企画・開催・運営は全て学生から構成される実行委員会が行っており、教職員の直接的な関わりは確認できなかった点から、「没交渉的」であったといえよう。

⑤活動の成果

活動の成果については、パンキョー革命は「学生への啓発」「共通教育の内容及びシステムの一部改善」、STAR阪は「学生への啓発」、人科祭シンポは「学生への啓発」、「個人の問題意識解決」があったことが確認できる。

実際に目で見える形での成果をあげたのは、パンキョー革命のみであるが、「学生への啓発」が成果としてあったという点では全ての活動で一致している。

5. 各活動の比較から得られた今後への示唆

本章においては、前章での考察で浮かび上がった、今後の学生参加型FD・教育改善活動、及び今後の大学教育改善に向けて、若干の示唆を述べる。

第一に、活動内容・方法の比較を見るに、「イベントの開催」ということは学生参加型FD・教育改善において重要な要素となるだろう。イベントを開催するからこそ、多くの学生・教職員の参加を得ることができ、また運営側のモチベーションの持続・向上にも資すると思われる。

第二に、活動目的については、ある程度コンパクトにした方が議論の発散が少なく、結果的に成果が見えやすいことが伺える。大学そのものの改革・改善を目的とする活動であっても、そこに至るまでの目標は対象と実現

可能性を十分に検討することが重要であろう。

第三に、活動の背景は三者三様であったが、これはつまり学生参加型FD・教育改善活動はその「きっかけ」を問わないということであるといえる。実際に、学生と教職員の私的な懇親会から発生し、現在も活動を続けている組織も他大学には存在する⁽⁵⁾。

第四に、学生と教職員との関係については、全く関係が無い状態より、関係があることで飛躍的に活動内容が向上することが見受けられる。ただし、その関係の形態も重要であり、要請を受けた時やイベント開催時だけ参加する、「協力」ではなく、普段のミーティングや企画の時点から議論に参加する「協働」の形の方が実質的な改善につながりやすい。学生・教員・職員の三者のうちどこか一つが発言力や主導権を持つのではなく、それぞれが独自に持っている「資本」を活かしながら活動を進めていくことが欠かせない。

ここまで、約30年という長期的な視点で学生参加型FD・教育改善の活動を分析、検討してきたが、より後の年代になるほど、活動が質的に向上していると言える。言い換えれば、本稿で取り上げた三つの活動は、連続性こそ無いが、年が進むごとに前進が見られる。特に、人科祭シンポとその他2つの取り組みは規模や継続性という観点だけでみても顕著に向上している。この理由として、学生と教職員の関係のあり方や密度が大きく関わっているとみていいだろう。即ち、学生運動時代の一部でみられた対立的な関係でなく、人科祭シンポでみられた没交渉的な関係でもなく、協力的な関係になったことが向上をもたらしたと考えられる。また、STAR阪で見られたような、「ただ関わる」だけの関係から、パンキョー革命で見られる「協働」の関係へと発展したことが、さらなる質の向上につながっていることも伺える。

しかしながら、パンキョー革命が、一定の成果は生み出したものの、未だ大学教育をドラスティックに変革したとは言えない。つまり、これらの活動が大学教育改善への特効薬とはならない点は、いつの年代においても変わらない。学生の授業への不満はいつの時代も絶えず存在し続けている。今後の学生参加型教育改善は、「常に大学教育に不満を持つ学生は存在する」ということを前提とし、不満を持つ学生を「協働」という観点を重視したうえで上手く取り込み、推進力としていくことが重要であろう。

6. 終わりに

最後に、本研究における課題を述べる。

まず、活動内容の、特に人科祭シンポについて、収集できた資料が限定的であり、インタビューで補完することに努めたものの、開催から既に30年以上が経過しているという問題もあり、当日シンポジウムの中でどのような議論が行われたのか完全には把握しきれなかった。

また、本研究は大阪大学での活動のみを対象としたものであり、他大学の活動との比較を行い、より結論の客観性を担保することも今後、必要であると考えている。

加えて、本稿では教職員の参加の重要性についても述べているが、どのようなメカニズムを用いれば、活動の質的な向上につながるのかという事についての検証も課題である。

これらの課題については、稿を改めて明らかにしていきたい。

謝辞：本稿の執筆にあたり、「人科祭シンポ」についての聞き取り調査に快くご協力下さった、富山大学人文学部 佐藤裕教授並びに早稲田大学大学院教職研究科 田中博之教授のご両名に厚く御礼申し上げます。またパンフレット『1982 人間科学部学部祭シンポジウム あきらめていませんか？おもしろくない授業』の原文画像ファイルを提供して下さい、富山大学大学教育支援センター 橋本勝教授にも厚く御礼申し上げます。

受付 2013.11.22 / 受理 2014.01.29

注釈

- (1) 「i*See」, 「学生FDサミット」は共に、学生参加型大学改善に取り組む、または興味がある組織や個人を対象に、実情の報告やディスカッション、分科会等を行う全国規模のイベント。i*Seeは2005年より岡山大学が、学生FDサミットは2009年より主に立命館大学が主催しており、2013年現在も毎年開催されている。
- (2) パンフレットの全文は資料1として文末に掲載した。
また、聞き取り調査についての詳細は資料2として文末に掲載した。
- (3) 当時の名称。現在は改組され大阪大学全学教育推進機構に名称が変更されている。
- (4) しかしながらFDやSDという視点を意識して活動しているのは教職員のみであり、学生は「FD・SDへの協力」ということを特に意識して活動しているわけではない。また「FD・SDに協力」という趣旨で学生を募集もしていない。
- (5) 例として、京都文教大学で行われている学生参加型FDの

組織である「FSD project」がある。(村山, 2011)

参考文献

- 木野茂 (2012) 「第四章 学生FDサミット」木野茂編『大学を変える, 学生が変わる』ナカニシヤ出版 pp.69-102
- 中央教育審議会 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」
- 秦由美子 (2006) 「特集2 学生が大学を変える!!」『創造と実践』第6号 大阪大学大学教育実践センター pp.28-33
- 服部憲児 (2012) 「第七章 パンキョー革命」木野茂編『大学を変える, 学生が変わる』ナカニシヤ出版 pp.147-166
- 廣内大輔 (2008) 「わが国の大学運営における学生参加－その実現可能性を中心に－」『大学教育学会誌』第30巻 第1号 pp.103-108
- 村山孝道 (2011) 「教・職・学がつながる, FSDprojectでつながる」『大学マネジメント』第7巻 第5号 大学マネジメント研究会 pp.31-37
- 文部省高等教育局・大学における学生生活の充実に関する調査研究会 (2000) 「大学における学生生活の充実方策について (報告)」
- 臨時教育審議会 (1986) 「教育改革に関する第二次答申」

【資料1】

パンフレット『1982 人間科学部学部祭シンポジウム あきらめていませんか？おもしろくない授業』

※この資料は1982年11月13日に大阪大学人間科学部において配布されたパンフレット、『1982 人間科学部学部祭シンポジウム あきらめていませんか？おもしろくない授業』の画像データを転記したものである。パンフレットの実物は表紙・裏表紙等合わせて14頁からなっているが、ここでは本文のみを記載している。なお、転記の際、一部判読が困難な箇所があり該当箇所については□に置き換えた。また、転記上問題のある箇所については*で示し、直後に註記した。また、パンフレットの画像データの一部（pp.1-2）を資料中に図1として提示した。

当資料は橋本勝教授（富山大学大学教育支援センター）より、学生参加型FD・教育改善の歴史に関する資料として提供を受けた。

1982年人間科学部学部祭シンポジウム

Theme：

あきらめていませんか？おもしろくない授業！

このシンポジウムの目的

現在、学生からも教官からも人間科学部の授業カリキュラムに対する不満の声が、数多く聞かれます。たとえば教養生からは諸問題の概論がおもしろくないという意見がありますし学部生からは授業のあり方が不満だという意見があります。また、教官からはカリキュラム全体のあり方に疑問を抱く声が出ています。ところが、学生にしろ、教官にしろそういった不満を持っているにもかかわらず、「大学なんてこんなものだ」とか、「おもしろい授業なんて、簡単にできるわけがない」と思っておもしろくない授業をあきらめているのではないのでしょうか？しかし、不満をそのままにしておいたのでは、いつまでたっても現状をよくすることはできません。

そこで、自治会は、この学部祭で授業改善を考えるシンポジウムを企画しました。教官・学生・OB・院生のみなさんに、授業の何がどう不満なのか、その原因を、さらに、改善のための具体案を自由に討論してもらおうと思います。

このシンポジウムで使用する資料

同じ人間科学部の学生、教官であっても、それぞれの興味関心や進路などによって、現在の授業に対する評価や改善案に対する意見は違ってきます。そこで、どのような意見があるのかを明らかにするために、事前調査として以下のアンケートとインタビューを実施しました。

◇教官インタビュー	10 名
◇学部生アンケート	45 名回収
◇学生個別インタビュー	10 名
◇OBインタビュー	10 名
◇教養生アンケート	名回収 <small>*原文でも人数は空白</small>

このシンポジウムでの討論の枠組

授業に対する不満の声は、たとえば「おもしろくない」、「興味がない」、「こんなことやっても意味がない」、あるいは「もっと他のことをやってもらいたい」などというものです。しかし、これだけでは一体、授業の何がどのように不満なのかを明らかにすることができず、したがって授業を改善する具体案も出せません。そこで、シンポジウム実行委員会はインタビューやアンケートの結果などをもとに分析した結果、次の三つの論点で議論すること

が妥当であると判断しました。

《1》教育ストラテジー（戦略）と授業改善

ここでは、人間科学部の特殊性にはよらず、どの学部・学年にも□□されている授業技□について議論します。おもしろくない授業は組織的な計画もなくずるずると進んでゆく授業、あるいは学生と教官のcommunicationのない一方通行的な授業なのではないでしょうか？

《2》人間科学と授業改善

人間科学の理念は、諸科学の協力、即ち「学際」ということが唄われています。また、学生からは、人間科学を求めて来ているのに、人間科学は教えてもらえないという不満が出ています。研究のためにせよ体系的な人間科学を提案するためにせよ、「学際」であることは必要でしょう。そこで、「学際」ということが授業を通じて行われているのかどうかについて考えてゆきたいと思います。

《3》進路と授業改善

現在の大学の大量化に、授業がどう対応しているのかを討論します。多くの学生が授業をおもしろくないと感じるのは、就職志望者の興味関心に授業が答えていないからではないでしょうか。一方、進学志望者の授業や院入試への不満も考えてゆこうと思います。

1 教育ストラテジー（戦略）と授業改善

—方法や形態を中心に—

a. はじめに

アンケートやインタビューの結果を見てみると、授業が一方通行でおもしろくないという意見が多くありました。このように授業の方法や形態は、人間科学の理念や志望する進路から来る問題意識とは別に、一つの大きな論点として検討できるものだと思います。そこで第一部においては現在の授業のどのような点がおもしろくないのか、また、授業をおもしろくするための授業設計の仕方や教育の手立てはいかなるものであるかを話し合ってみようと思います。

b. 現状把握

シンポジウム実行委員会は、授業の不満に対するアンケートとインタビューの結果を分析し、問題の構造が以下のようなものであるという判断に到りました。

《どこがおもしろくないのか、どういう授業がおもしろくないのか？》

教養・学部に関わらず、また、講義を中心として、学生の不満は次のように集約できるようです。

- ・表面的である ・概論的知識の羅列のつまらなさ ・知識の単なる羅列よりは、焦点を絞って考える方がよい
- ・教官のやっていることを非常に詳細に（問題意識も含め）紹介するほうがよい…など、

「広く浅い知識を教えることに対する不満」

- ・教官の問題意識と学生の問題意識のからみ、相互作用の不足 ・コミュニケーションがない …など、

「学生と教官のinteractionの欠如に対する不満」

- ・講義の内容について、なぜそれが重要なのか、どういう背景からそのような問題が出てきたのか、あるいはそのことがわかることでどのようなことができるようになるのか、つまり内容の意義、背景、応用などの解説があいまいでよくわからない。

「授業設計における教育目標のなさ」

しかし、一方で、現在の授業に対して肯定的な意見もありました。

- ・講義は極論すれば一方通行でよい。各分野の基本確認・方法を知ることであり、必要悪的なものである。…など。先にあげた3つが、まず論点として考えられると思います。また、もう一つ考えておかなければならないことは、授業に対する考え方、つまり授業観が異なれば、現状に対する認識も違ってくるので、授業の果たす役割についても議論が必要でしょう。特に教養においてはほとんどが講義形式の授業であり、communication不足を演習

や実験実習で補えないという点が一つの問題であると思われます。

それでは教官はどのような現実認識をしているのでしょうか？インタビューの結果をまとめると……

- ・自分を授業で出す必要は感じるがまだできていないというように、教官から授業で問題意識を出していく必要は認めていても、実際そのようなことはできていないという見方がありました。
- ・教官は怠けているということ認める意見もありました。しかし、一方では、
- ・どんな授業がおもしろいのか、その理想像は学生が出してほしい…というように、学生が授業に何を思っているのかわからないという意見もありました。

また、授業観とのつながりで考えられることですが、

- ・本来、学問とは退屈なもの・おもしろくなくても予備知識として聞くべきだ…などの現状を肯定的にとらえた意見もあります。

ここでもやはり、講義の持つ役割についての考え方の違いをはっきりさせておく必要があると思います。

以上のような認識があるわけですが、それではそれらを引き起こしている要因は何なのでしょう？

まず、教官は次のように考えているようです。第一に、学生がおもしろいと思うものと、自分の興味の対象にずれがあるということ。第二に、学生が本を読まない、論文の立体的な読み方ができない、など、学生の学力、基礎知識が低下しているということ。第三に、授業中でも授業後でも、学生がかみつかなくなった。粗野さがなくなった。など、学生の□□性の低下があるということ。第四に、授業中不特定多数で、かつ匿名である学生とのinteractionは難しい。論文の書き方の指導や添削などはしんどくてやれないなど、interactionそのものが難しいものであること。以上の四点が主なものとなるようですが、さらに、基礎知識としてどうしても知っておいてほしいものを絞り込みたいので、講義的になってもしかたない、というような、不満をもつ学生とははっきりずれている授業観もあって、認識の違いを生じています。

次に、学生はどうとらえているのでしょうか。(ということですが、アンケートに具体的な質問項目がなかったので、ここには記せませんでした。)

c. 改善のための具体案

では、おもしろくない授業を改善するにはどうしたらよいのか、その具体的な手立てを検討したいと思います。もちろん授業の果たす役割についての考え方、即ち授業観が違えば、現状にはさして不満もないので改善する必要はないという意見が出てくるでしょう。しかし、たとえば講義では学生と教官のcommunicationはなくてもよいという授業観にとっても、他の点についての改善案は参考になることがあるでしょう。したがって、授業観の違い

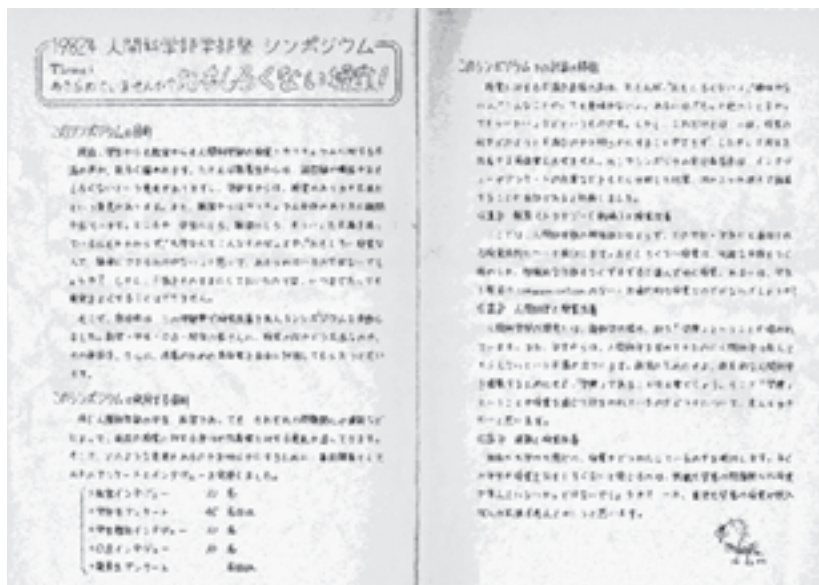


図1 「1982 人間科学祭シンポジウムあきらめていませんか? おもしろくない授業」の画像データの一部

について念頭に置いた上で改善案を考えていくことは必要だと思われます。

シンポジウム実行委員会は、アンケート・インタビューをもとにして集計した不満やその原因から判断して、次の論点で改善案を検討していくことが有効であると思います。

1) 教官と学生のcommunicationのあり方について（communicationの欠如という不満に対して）

たとえば、教官からは「諸問題をやめて、演習形式を最初からするべきである」という意見も出ています。また、「討論やグループ発表を取り入れてほしい」という学生からの意見もあります。

2) 授業計画について（教育目標の欠如という不満に対応して）

教官は、はっきりとした目標や手順、または評価表とそのfeed backなどを計画せずに授業を行ってはいないでしょうか？

3) 授業の果たす役割について（広く浅い知識の羅列という不満に対応して）

授業観の違いをここでも、もう一度検討する必要があるでしょう。そして、どのような役割を授業が果たせば、概論的な授業に対する不満を解決できるかを考えてみようと思います。

2 人間科学と授業改善

—学際・講座紹介について—

a. はじめに

人間科学部ができてすでに10年がたちました。しかし、今だに「人間科学」とは何かということについて、またその研究や教授のあり方についてもはっきりとした結論は出ていないようです。「人間科学部の概要」には次のような定義が書かれています。「人間をめぐるこれらの問題の由って来たる背景とその実態を科学的に究明する視点を確立し、妥当な解決を発想するために、人間の行動、社会、形式に関する諸科学のいっそうの推進とそれらの諸科学の協力による研究及び取り組みが必要である。人間科学部は、この要請を満たすために一学科制とし、諸科学と有機的な関連をもたすようにしてある」

また、学生にも各々様々な人間科学についてのイメージがあるようです。ただし、授業が人間科学の理念を満たすべきかどうか、あるいは大学での研究そのものが人間科学を意識して行われるべきかについては意見の一致は見られないようです。たとえば、ある学生からは、現在自分が対象としている分野は、他の講座とは直接関わらないので、諸科学の関連などには今のところ関心はない、というような声が聞かれます。

しかし、現在の授業や研究が、諸科学の有機的関連もなく、分析されているということに関しては、共通の認識があるようです。そこで、第二部では本学部固有の問題として、人間科学の理念と授業改善について考えていきたいと思います。

b. 「人間科学」に対する欲求

人間科学というまだ新しく、はっきりとしたイメージのない学部へ入学してきた学生たちの中には、「人間科学」に関して次のような欲求があると思われます。

①学際であること

ここでは、また「学際」であることが具体的にどういう意味を持つかについて統一が取れておらず、話し合う必要がありますが、多くの学生が「学際」ということが人間科学を考える上でのポイントだと考えています。

その代表的な考え方は、「研究するテーマがあって、その研究対象に対して様々な分野を統合していく。ただの寄せ集めではない」というものでした。

一方、学際も大事だが、その前に専門家としてきちんとするべきことをやっておくということがまず第一であるとい考えの人もあります。

②講座紹介

講座紹介ということは、特に人間科学といことと関係なく教養部において必要とされる事ですが、人間科学部では、人間科学がどういうものかもわからず実際にどういうことをやっているのか、そしてそういうことを自分

で研究できるのかもわからない。そこで、はっきりした形で講座紹介をしてほしい、するべきだという声が出ています。

c. 具体的な不満点

まず上の①に関して、具体的にどのような不満があるのでしょうか。アンケート・インタビューには次のような声があります。「教養時代に、諸問題、概論などをもっと系統だったものにすべきではないか（こうした意見の持ち主は、それができないのなら諸問題、概論は完全に講座紹介にしまえと考える人が多いようです）」「学部の三つの軸の関連がなさすぎる」「人間科学に限定せず、他学部の学位も簡単に取れるようにしてほしい」OBインタビューでも「昔はもっと他学部の授業を取っていた」という声がありました。

また、②の講座紹介については、学部生アンケートで、特に諸問題・概論の目的として講座紹介をあげた人が24.4%ありました。これは、どちらかといえば少ないですが、諸問題・概論の果たすべき役割についての疑問であり、他の部分で講座紹介が保証されるべきと考えている人も多いようですから、ほとんどの学生は何らかの方法で講座紹介が行われるべきであると考えているのではないのでしょうか。

d. 改善案に向けて

以上の現状認識と、不満をふまえた上で、その不満をいかにして解消すべきかを考えたいと思います。

3 進路と授業改善

a. はじめに

教官の多数意見は、大学は研究者育成の教育しか行うつもりはないということです。また個々の教官の授業に対する態度にも、院に進学する者しか相手にしようとしないうところがあるように思われます。しかし、実際には院に進学するものは10数%であり、また院に進学したからといって研究者になるとも限りません。そこで、ここでは、こういった大学教育観の現実とのズレというところから考えていきたいと思います。

b. 現状の把握

教官へのインタビューでは「大学教育は本質的には研究者育成のためのものであり、そういう構造になっている」「授業の対象は院生になる人」などの発想があり、カリキュラムの構成や教官の態度にも、研究者育成を中心とするという考えがみられます。実際の授業でも、院入試のための語学の訓練であるとか、実験技術の習得などが目的であったり、学生にもそういう意味で高い水準を持っておられるようです。

c. インタビュー・アンケート結果

それでは、研究者にならない人にとっては人間科学部での教育は何なのでしょう。この点に関して、学生の意見を調べるとともに、OBの方にインタビューしてみました。

学生のほうは「本音で考えてみて、あなたは何のために学部で勉強しているのですか?」という質問に対して自由記述で答えてもらった結果を見ると、院進学希望者は知的好奇心や将来のためと答える人がほとんどなのに対して、就職しようと思っている人は、単位のため、卒業のためという人と、何となく大学に来ているとか、社会に出たくないといったモラトリアム型を合わせると(29人中8人)、知的好奇心(9人)、将来のため・自分のため(9人)とほぼ同じになる。というように、就職希望の方が授業に対して消極的であるという傾向があるのではないのでしょうか。しかし、人間科学部で学んだことが将来役立ってほしいかという質問に対しては、就職希望の人の80%が(進学希望者は88%)役立ってほしいと答えています。役立ってほしいが、別にそれが第一目的ではないと考えるか、就職と教育内容とはつながらず、期待してもムダと考えているのが実情ではないのでしょうか。OBへのインタビューは、実際に研究内容と職業との関連があるのかどうかということを中心に聞いてみました。全般的に言えば、まとまった知識や専門分野が直接役立つことはほとんどないけれども、ある程度意識して人間を対象に

した仕事をしている人が多く、「人間科学」というものとの関わりを今も持ち続けている方が多いようでした。

大学で学んだ知識や技術とのつながり方は、断片的な知識しか頭に残っていなくても、例えば「調査の読み取り方が他の人より科学的である（民間）」「人間科学や心理学などの基本的な考え方、枠組みなどがわかっていることが強み（教員・公務員）」「人間の行動についてある程度科学的な考え方ができる（民間）」というように、間接的につながっている。また、「人間科学部の授業に関わらず、他の学部の授業も取ったことがよかった（公務員）」などは広い知識・教養を強調する人もいる。あとで考えて、やっておいた方が良かったと思うこととして、調査・テストの技術（公務員＝社会教育）、コンピューター（民間）、カウンセリングの技術（塾＝事務）などがあげられました。

知識というのではないかもしれませんが、人間に対する見方が、あくまでも独立した人格を持った人間として見る事ができることをあげる人もありました。「生徒を人間に対する関心で見ると（教員）」「雇用などを単なる本人の責任で片付けしないで、なぜその人がそうなったのかをまず考える（公務員・福祉）」というようなことです。逆に、「大学にいるときは狭い範囲で（自分の今までの生き方などから）考えていた（つまり客観的な考え方ができなかった）が、職場でいろいろな人と対応してみても自分だけの問題ではなく考えることができるようになった（塾＝事務）」という意見もありました。

大学教育のあり方として、多くの意見があがったのは、現実の社会と関わりを持つことが必要だということです。そうしないと現実とズレが生じるというわけです。例えば、ということであげられたものは、「中学や高校の実態調査をする（教員）」「実際に識字学級に来て教える（公務員・社会教育）」などです。また、「ボランティア活動をする」「家庭教師をする」なども、授業とは直接関係がないですが、そういう意味で、よい経験になるだろうということでした。

その他「臨床心理をもっとやるべきだ（教育研究所）」「いろいろな資格をとること（民間）」というような意見もありました。

d. まとめ

OBの方々のこのような意見は、単に将来生かされるかどうかという意味からだけでなく、研究者にならない人にとっても「おもしろい」授業を作っていく上で役に立つのではないのでしょうか。また、研究者になる人にとっても、現実社会との関わりを持つことや、人間に対する見方を養うといったことは面白く、役に立つのではないのでしょうか。

以上、自分たちでもかなりできが悪いとは思いますが、今回はシンポジウムのための枠組と基調報告でした。最初の理想とは大幅に違ってしまっており、資料もきちんとした形で出せておらず、考えも明確にまとまっておらず、できていないことだらけです。このあたりの取り組み姿勢につきましては、内容とともにみなさんのきびしいご意見・ご感想をお聞かせください。

しかしながら、それでもこのシンポジウムが何らかの意義を持つことができたなら、それは、アンケートやインタビューに熱心に答えて下さった学部・院の学生のみなさん、OB・OGのみなさん、教官のみなさんのおかげです。本当にありがとうございました。

そして本日、シンポジウムに参加していただけてどうもありがとうございます。

シンポジウム実行委員会

人間科学部 学部祭企画

シンポジウム「あきらめていませんか？おもしろくない授業」

パンフレット

1982年11月13日 発行

編集・発行

シンポジウム実行委員会

〔佐藤裕・田中博之・楊井一彦・絵所永〕

【資料2】「学部祭シンポジウム実行委員会」聞き取り調査 詳細

聞き取り調査1

2012/10/27 於：早稲田大学早稲田キャンパス田中博之研究室

回答者：田中博之 教授（早稲田大学大学院教職研究科）

(1) 活動内容（発祥から消滅まで）

Q. どのようにシンポジウム実行委員会が発足したのか。

A. 9期生の中心メンバー10人ぐらいの日常的な話し合いの中から自然に出てきた話ではなかったか。自治会メンバーとも重なっていたと思うが、それを意識した活動ではなかった。遊びも真面目なことも企画した中心メンバーで、石橋下宿生+自宅生数人であった。中でも佐藤裕先生は中心的存在であった。

Q. なぜ活動を行おうと思ったのか。

A. ①授業がおもしろくなかった。②人間科学とは何か？という問い。院進学希望者の不満から出てきた（当時3回生だった）。①に関連して）話は分かりにくい、聴き方を変えてみると極めて論理的な話だったという先生もいた。②に関連して）人間科学の全体像が分からなかった。それを教えてもらえらると思っていた（が自分で作れと言われた）。②に関連して）個人的には「人間科学を作る」という意識があった（全体的にはそういう感じでもなかったと思う）。

Q. 学生主導で発足したのか、教員主導で発足したのか。

A. 学生主導。教職員の関わりは無し。不満をぶちまけたかった。教員に思いをぶつけたら変わるのではないかと思った。

Q. 何回ぐらい企画をおこなったのか。

A. このテーマについては単発であった。

Q. 活動のモデルはあったのか。

A. 無し。すべて自分たちで考えた。好きなようにやった。

Q. どのように終焉を迎えたか。

A. もともと単発の企画であった。

(2) 活動の目標・方針

Q. 一度限りの志向だったのか継続を目指していたのか。

A. 継続は目指していなかった。

Q. 参加の圧力はどれぐらいか。

A. 無し。何でも楽しむ学生だった。楽しいサークル的なノリでやった。

(3) 活動の背景・大学の状況

Q. 活動当時の人科の状況。

A. 人間科学部ができて間もない頃で、新しいモノを求めた学生が多かった（中にはやりたい研究分野や付きたい先生が明確な学生もいた）。人間科学の全体像を提供してくれない教授への不満があった。

Q. どのような授業が行われていたか。

A. 講義中心。心理や実験系では例外もあった。もちろん面白い先生もいた。

(4) 学生の問題意識・大学観（当時の大学を取り巻く環境）

Q. 学生運動と関連はあるのか。

A. 全く無し。人科はノンポリだった。

Q. 当時の学生の授業に対する意識はどうだったか。

A. （今思うと）高くなかった。受け身だった。与えられたものに面白くないと言っただけ。特に就職組は意識や強い拘りは無かったと思う。3年次に教育学の院進学希望者向けに特別講義（教員主導の課外特別ゼミ）が行われた。「元気は良いが基礎学力が足りない」という理由で、該当者は半強制で参加させられた。

(5) 学生と教職員との関係（教職員の関与があった場合）

Q. 有志が参集したのか、教職員から講座などに割当があったのか。

A. 教職員の関与は一切無い。講座などへの参加割当も当然無し。教員にはパンフは配った。が、読んでもらえてなさそうだ、という思いはあった。

(6) 志向された改善策

Q. (シンポジウムの結果として) 何が実践されたか。

A. 授業は変わらず、軽い敗北感のようなものはあった。何もあまり変わらなかった。FDにも繋がっていない。シンポジウム自体は70～80人ぐらい集まった（と思うが…）。

Q. 成果として何が残ったか。

A. 院進学者には反省的に勉強になった（大学教員になった時に振り返ってみて）。何か形に残ると言うよりは、個人の問題意識に解消されたのではないか。

聞き取り調査2

2012/11/16 於：富山大学人文学部棟7階

回答者：佐藤裕 教授（富山大学人文学部）

(1) 活動内容（発祥から消滅まで）

Q. どのようにシンポジウム実行委員会が発足したのか。なぜ活動を行おうと思ったのか。

A. 学部祭におけるソフトボール大会やファイヤーストームなどの企画の1つであった。

Q. 学生主導で発足したのか、教員主導で発足したのか。

A. 学生主導。学生がやること自体には肯定的だった。自治会活動に対してもそうであった。

自治会は7期生頃までは政治色があったが、9期生の時にノンポリになり、教育問題なども取り上げるようになった。

Q. 何回ぐらい企画をおこなったのか。

A. たまり場（学生控室、自治会室）で行っていた。（頻度などは覚えていない）

Q. 活動のモデルはあったのか。

A. 他大学は調べていない。新歓祭や学部祭などで上回生のやっていたことは見習ったはずだ。

Q. どのように終焉を迎えたか。

A. もともと単発の企画だった。

(2) 活動の目標・方針

Q. 一度限りの志向だったのか継続を目指していたのか。

A. 継続は目指していなかった。

Q. 参加の圧力はどれぐらいか。

A. 全くなし。教員にもシンポジウムを呼びかけた。来た人もいたように思う。

(3) 活動の背景・大学の状況

Q. 活動当時の人科の状況。

A. 産学協同は当時、悪の権化と見なされていた。「人間科学とは何だ？」という関心・こだわり、「統合されていない」という思いはあった。自分たちで考えようという機運があった。

Q. どのような授業が行われていたか。

A. 期待はしていなかった。「あきらめている」のが前提にあった（ので、このようなシンポのタイトルになったのかなあ）。

ただし、教育に対する関心はあった。1回生配当の「人間科学の諸問題」に対する上回生の批判はあった。が、9期生の頃には諦めがあった。

(4) 学生の問題意識・大学観（当時の大学を取り巻く環境）

Q. 学生運動と関連はあるのか。

A. ない。

Q. 当時の学生の授業に対する意識はどうだったか。

A. (佐藤先生自身は) 授業には出ていなかった。楽しいのだけ、興味のあるのだけ出ていた。（教養も専門も）

勉強は自分でやるのが当然だった。

(5) 学生と教職員との関係（教職員の関与があった場合）

Q. 有志が参集したのか、教職員から講座などに割当

があったのか。

- A. 割り当てなどはない。有志が参集した。このシンポジウムは公的なものという意識があった。だから、事前インタビューについては先生にも答える義務があるという意識があった。

(6) 志向された改善策

- Q. (シンポジウムの結果として) 何が実践されたか。
A. 教育自体が変わったかどうかは分からない。もと

もと具体的にどうしろというものはなかった。

- Q. 成果として何が残ったか。
A. 学年間交流が今の自分に影響を与えている。そのような授業（社会学演習）を作った。今の教育活動において、学生にしかける、まずは考えさせることをしている。学生時代が影響しているように思う。